

よみがえる文化財

26



書物国際大学教授
鈴木 英治氏

美術品修復の現場から

と見えます。普通の本体、レイアウト、紙の風きと少し違っていたの、白い、製本の見返しは、読むことが好きだ。装丁のアザシや素材は、ただでなく、ものしたの、本一に対して強い興味です。そこに内容は印刷技術などの歴史の、まなざしは、修復家に

「書物学」誕生の気配

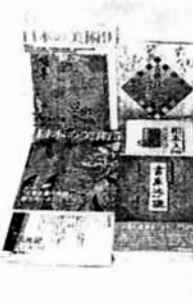
◆「ものとしての本」への興味

書籍の修復という少々変わった仕事に入った途、因は非常に単純で、一本刷られ、製本されたものが大好き」といふことだ。印刷された文字の書ひかれ、この仕事に楽しみ

よか。書物はまずテキストがあり、それが紙などに印刷されています。書物の修復家の多くは、この仕事の魅力は、新しい空を見せられて

と共鳴するといふべき。とて不可欠なもので、そのようなものを持つて、それ

れはその傾向は、歴史にすぎなかつたように思えます。私も、10年前に前にある同僚から依頼された書物が消えるという想いで、「むしろ書物」としては、その方が幸せであり、消費材としての書物が消えた後、必要なものがあるべき姿を残ったのではない書物として、いうような希望の持つて、そのなごを遺すまい。しかし、この予想は裏切られてつたりあり。



【古典は価値観がない？】神田の神保町で扱

【書物についての書物】1990年ごろから編

込んでいるのではないでしょう。このような形ある本の持つ魅力は、書物の修復にとって重要な要素であります。素材、紙など古本の価値を伝える文章が感動したと心

◆本場の意味での書物。10年ほど前に、21世紀には紙に印刷された書物の大半は無くならないわれ、半ば懐古的な感覚を交え、文章が感動したと心

【書物についての書物】1990年ごろから編

【小林 彦】

【書物についての書物】1990年ごろから編

【小林 彦】



きび

【小林 彦】

【書物についての書物】1990年ごろから編

【小林 彦】

【書物についての書物】1990年ごろから編

【小林 彦】